

統計計算の基礎

Y-teraya

2025年11月3日

概要

本資料は、統計の基礎的な計算方法をまとめたものである。実験計画法を主として扱い、実務で直結する内容（Excel 関数など）を備忘録として記しておく。ほか、線形代数や微分積分も取り扱う。

また、総和 \sum の記号に苦手意識を持っている人も多いので、理解して欲しい重要な式のみ \sum 無しで表現した式も併記している。

目次

第 I 部 初歩的な計算	1
1 指数 Exponent	1
1.1 累乗 Repeat multiplication	1
1.2 0乗とマイナス乗	1
1.3 累乗根 Power root	2
第 II 部 数学の記法と用語	3
2 國際単位系 International System of units	3
2.1 基本単位系 Basic units	3
2.2 接頭辞 Prefix	4
2.3 単位換算 Unit conversion	4
第 III 部 統計のデータ	5
3 代表値 Average	5
3.1 平均値 Mean	5
3.2 中央値 Median	6

3.3	最頻値 Mode	6
3.4	最大値 Maximum・最小値 Minimum	7
4	散布度 Dispersion	7
4.1	分散 Variance・標準偏差 Standard deviation	7
4.2	範囲 Range	8
第Ⅳ部 データのイメージ		9
5	スカラー Scalar とベクトル Vector	9
5.1	ベクトルの加減法	10
5.2	単位ベクトル	10
5.3	ベクトルの成分表示	10

[青文字](#)をクリックすると、対応したページに遷移します。

留意事項

1. 色付き文字やハイライトは重要事項または強調箇所である。
2. 自身の好み（独断と偏見）で作成しているため、旧字体や座標を行列で記載している箇所がある。
3. 本資料の著作権は、[CC BY-NC-SA 4.0](#) を適応する。

第Ⅰ部

初步的な計算

1 指数 Exponent

1.1 累乗 Repeat multiplication

任意の^{*1} a を n 回掛けたものを a の n 乗といい a^n ^{*2} と書く。 a を底、 n を指数という。特に、指数が正の整数 ($n > 0$)^{*3} のとき累乗といい、それ以外の場合は、べき乗 Exponent という。

指数法則 Exponential laws は、定義より自明^{*4}である。底を a 、指数を m, n としたとき、次の 2 法則が成立する。

$$a^m \times a^n = \underbrace{a \times a \times a \times \cdots \times a}_{m\text{個}} \cdot \underbrace{a \times a \times \cdots \times a}_{n\text{個}} = a^{m+n} \quad (1.1)$$

これは単純。 a を m 回掛けたものと a を n 回掛けたものを全て乗算したら、 a を $m + n$ 回掛けたものと同じになる。

$$(a^m)^n = n\text{個} \underbrace{\begin{array}{ccccccc} a & \times & a & \times & \cdots & \times & a \\ a & \times & a & \times & \cdots & \times & a \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots \\ a & \times & a & \times & \cdots & \times & a \end{array}}_{m\text{個}} = a^{m \times n} \quad (1.2)$$

少し捉えにくいかもしれない。式 (1.3) のように、 a を m 回掛けたものを縦に n 個並べる。それは a を $m \times n$ に並べた長方形となり、 $m \times n$ 回乗算したものと同じだと分かる。このように、視覚的に理解できるだろう。

式 (1.1), 式 (1.2) は特に暗記しなくても、累乗がどういうものだったか？を考えれば簡単に分かる。

1.2 0乗とマイナス乗

式 (1.1) が正しいと仮定すると、0乗とマイナス乗を定義できる。まず、式 (1.1) を $n = 0$ とすると次である。

$$a^m \times a^0 = a^{m+0} = a^m \quad (1.3a)$$

^{*1} 「すべての」、「どんな」、「どれを選んでも」と同じ意味である。

^{*2} 指数が複雑な場合、 $a \exp(n)$ と表記される場合もある。

^{*3} 第Ⅱ部 [数学の記法と用語](#)で取り扱う。

^{*4} 一般に法則として紹介されていることが多いので、本資料では法則として扱う。また一般に法則とは、経験則から導かれた証明できない事象のことを指す。

a^m に a^0 を乗算しても変化しない。その数は、**1** なので次と定義される。

$$a^0 := 1 \quad (1.3b)$$

式 (1.4) が正しいと仮定し、式 (1.1) を $n = -m$ とすると次である。

$$a^m \times a^{-m} = a^{m-m} = a^0 = 1 \quad (1.4a)$$

a^m に a^0 を乗算すると**1** になる。その数は、**逆数**^{*5} なので次と定義される。

$$a^{-m} := \frac{1}{a^m} \quad (1.4b)$$

1.3 累乗根 Power root

n 乗すると任意の数 a になる数のことを累乗根といい $\sqrt[n]{a}$ と書く。 n 乗を強調して、 **n 乗根**ともいう。また、 $n = 2$ のとき、**平方根**といい \sqrt{a} と書き、ルートの左肩の 2 は省略できる。ただし、ルートで表記するのは見づらくなるので指数で表現したい。指数方程式を解くことで累乗根を指数で定義できる。 a を底、 n を指数と次である。

$$\sqrt[n]{a} = a^x \quad (1.5a)$$

辺々^{*6} n 乗すると、次である。

$$(\sqrt[n]{a})^n = (a^x)^n \quad (1.5b)$$

左辺はルートが外れ、指数で表現される。また、分かりやすいように 1 乗として書くと次である。

$$a^1 = a^{nx} \quad (1.5c)$$

底が同じ方程式^{*7}は、指数も同じである^{*8}。指数だけ取り出して等式にすると、次である。

$$1 = nx \quad (1.5d)$$

x について解き、 n 乗根を指数で表すと次で定義される。

$$\sqrt[n]{a} := a^{\frac{1}{n}} \quad (1.5e)$$

^{*5} 任意の数に乘算すると**1** になる数のこと。

^{*6} 両辺と同じ意味。左辺（左側の式）と右辺（右側の式）の両方の式という意味である。

^{*7} 等号で結ばれた式のこと。

^{*8} これが指数方程式の基本的な考え方である。

第 II 部

数学の記法と用語

2 国際単位系 International System of units

物理学 Physics に関わらず科学 Science の世界では、この単位系を用いて数値と単位の組を物理量という。7つの基本単位系を組み合わせ組立単位にすることで、さまざまな単位を作ることができる。組立単位を知ることによって、求めたい単位に変える単位換算を行うことができるようになる。

2.1 基本単位系 Basic units

基本単位は次の7つである。

表 1: 基本単位系

データの種類	英語	単位
時間	time	[s]
距離	route	[m]
電流	Intensity of current	[A]
質量	mass	[g]
絶対温度	Temperture	[K]
物質量	number	[mol]
光度	Luminous Intensity	[cd]

【余談】〈基本単位系の定義〉

基本単位系には、一義性^aを持った基準が必要であり世界共通のものである。その厳密な定義を紹介する。

2.1.1 時間の定義

^aただ1つに定まること。

2.2 接頭辞 Prefix

接頭辞とは、基本単位系よりも大きい・小さいことを表す指標のことである。SI接尾辞では $\times 10^{30}$ まで定まっているが、よく使われる $\times 10^{12}$ までを紹介する。

表 2: SI 接頭辞

(+) 接頭辞	英語	指数乗	(-) 接頭辞	英語	指数乗
T	Tera	$\times 10^{12}$	p	pico	$\times 10^{-12}$
G	Giga	$\times 10^9$	n	nano	$\times 10^{-9}$
M	Mega	$\times 10^6$	μ	micro	$\times 10^{-6}$
k	kilo	$\times 10^3$	m	milli	$\times 10^{-3}$
h	hecto	$\times 10^2$	c	centi	$\times 10^{-2}$
da	deca	$\times 10^1$	d	deci	$\times 10^{-1}$

2.3 単位換算 Unit conversion

単位は、定義に基づいて組み立てることで新しい単位ができる。基本的には、同じ意味を持つもの同士を分母と分子に置き、約分することで求めたい単位へと変える。次式は、「1日は何秒か？」を求めたものである。恐らく、一度は計算したことがあるだろう。

$$1 \text{ [day]} = 1 \text{ [day]} \times \frac{24 \text{ [hr]}}{1 \text{ [day]}} \times \frac{60 \text{ [min]}}{1 \text{ [hr]}} \times \frac{60 \text{ [sec]}}{1 \text{ [min]}} = 86,400 \text{ [sec]} \quad (2.1)$$

単位換算を行う上で押さえるポイントは、最初の単位と求めたい単位に注目し定義としてどの物理量同士が等しいか考え約分する必要がある。

第 III 部

統計のデータ

3 代表値 Average

データ全体を分布中心のデータ 1 つで表したもの代表値という。主に 3 つの値のことを指し、平均値 Mean, 中央値 Median, 最頻値 Mode である。ただし、これらの値がデータの代表ではない可能性もあるため、扱うときには必ずデータの代表として機能しているのか確認する必要がある [4, 5]。

3.1 平均値 Mean

主に算術平均のことを指す。全データを合計し、データの数で割ることで求められる。平均値を \bar{x} ^{*9}、データ数を n 、各データを x_k とすると、次と定義^{*10}する^{*11}。

$$\bar{x} := \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n x_k = \frac{x_1 + x_2 + \cdots + x_n}{n} \quad (3.1)$$

【平均値 概要】

メリット [2] 全てのデータを考慮できる。

デメリット 外れ値に弱い。

エクセル =AVERAGE(Cell₁: Cell₂)

【余談】〈平均にもいろんな種類がある！ [1]〉

上記では、算術平均（相加平均）を取り扱った。一般に平均と言わればこの算術平均だと思えばよい。ただ、他にも場合によっては使える平均があるので紹介する。

3.1.1 幾何平均（相乗平均）

算術平均は足し算においての平均であったが、これは掛け算においての平均である。平均値を G 、データ数を n 、各データを x_k とすると、次である^a。

^{*9} μ と置くこともある。

^{*10}:=は左辺を右辺と定義すると示す記号である。

^{*11} \sum の計算は、基本的に $1 \leq k \leq n$ ($k \in \mathbb{Z}$) の範囲内での総和を示す記号である。 \sum の下に書いてある数字から、上に書いてある数字までをカウントアップして足したものである。

$$G := \left(\prod_{k=1}^n x_k \right)^{\frac{1}{n}} = \sqrt[n]{x_1 \times x_2 \times \cdots \times x_n} \quad (3.2)$$

主に、成長率や増加率など比率や割合で変化する数の平均を算出したいときに用いる。

3.1.2 調和平均

調和平均は、一度逆数にしたデータの算術平均のことである。平均値を H 、データ数を n 、各データを x_k とすると、次である。

$$H^{-1} := \frac{1}{n} \left(\sum_{k=1}^n \frac{1}{x_k} \right) = \frac{\frac{1}{x_1} + \frac{1}{x_2} + \cdots + \frac{1}{x_n}}{n} \quad (3.3)$$

主に、平均速度や並列接続時の抵抗、直列接続時のコンデンサなど比率で表わされる数の平均を算出したいときに用いる。

\prod の計算は \sum の足し算を掛け算に変えたものである、基本的に $1 \leq k \leq n$ ($k \in \mathbb{Z}$) の範囲内での総積を示す記号である。 \prod の下に書いてある数字から、上に書いてある数字までをカウントアップして掛けたものである。

3.2 中央値 Median

データを大きさの順に並べた際の、真ん中の値を指す。例えば、データの集合 A を次と設定する。

$$A = \{x_k | 1 \leq k \leq 5\} \quad (3.4)$$

数列 x_k が昇べきの順に並んでいるとすると、集合 A の中央値は x_3 である。

【中央値 概要】

メリット [2] 外れ値に強い。

デメリット 全てのデータを十分に考慮に入れることができない。

エクセル =MEDIAN(Cell₁: Cell₂)

3.3 最頻値 Mode

データの集合内で、同じデータが存在する場合がある。その同じデータが最も出現する値を指す。例えば、集合 A 、式 (1.2) に次と設定する。

$$x_2 = x_3 \quad (3.5)$$

このとき、集合 A の最頻値は x_2 , x_3 である。

【最頻値 概要】

メリット [2] 外れ値に強い.

デメリット 1つに決まらないことがある. また, サンプルサイズが少ないと使えない.

エクセル =MODE.SNGL(Cell₁: Cell₂)

3.4 最大値 Maximum・最小値 Minimum

データの集合内で, 一番大きい値を最大値, 小さい値を最小値という. 例えば, 集合 A , 式 (1.2) を基にして考える. このとき, 最大値は x_5 , 最小値は x_1 である.

【最大値・最小値 概要】

エクセル (最大値) =MAX(Cell₁: Cell₂)

エクセル (最小値) =MIN(Cell₁: Cell₂)

4 散布度 Dispersion**4.1 分散 Variance・標準偏差 Standard deviation**

各データと平均との差の平均である. 一般にデータのバラつきを表す. 分散を s^2 ^{*12}, データ数を n , 各データを x_k とすると, 次である.

$$s^2 := \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n (x_k - \bar{x})^2 = \frac{(x_1 - \bar{x})^2 + (x_2 - \bar{x})^2 + \cdots + (x_n - \bar{x})^2}{n} \quad (4.1)$$

標準偏差はこの 2 乗を外したもののことである. すなわち, 分散 s^2 をルート $\sqrt{}$ に入れたものである. そのため, 標準偏差を s ^{*13} とすると次である.

$$s := \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{k=1}^n (x_k - \bar{x})^2} \quad (4.2)$$

【余談】〈なぜ 2 乗した誤差を考えるのか? [3]〉

平均との差であれば, 絶対値を用いれば良いと考えられる. 絶対値で計算する平均偏差と呼ばれるものを紹介する. 平均偏差は次で求められる.

^{*12} σ^2 と置くこともある.

^{*13} σ と置くこともある.

$$MAE = \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n |x_k - \bar{x}| \quad (4.3)$$

ただし、これは数学的に扱いにくい。次に 3 点挙げる。

1. 絶対値は函数として微分可能でなく扱いづらい。
2. 場合分けが必要になることがある。
3. $\bar{x} \neq \arg \min_{\bar{x}} \sum_{k=1}^n |x_k - \bar{x}|$ である。

特に 3 つ目が問題であるが、説明は参考文献の記事に譲る。

4.2 範囲 Range

単に最大値と最小値の差である。例えば、集合 A 、式 (1.2) を基にして考える。このとき、範囲は $x_5 - x_1$ である。

第 IV 部

データのイメージ

5 スカラー Scalar とベクトル Vector

スカラーは 1 つの数であり、ベクトルは 2 つ以上の数を束ねたものである。スカラーはそのまま、ベクトルは太字 x または 2 重文字 \mathbf{x} (文字に余計な線を 1 つ入れるだけ) で表現する^{*14}。よく、スカラーは大きさだけ持つ量で、ベクトルは大きさと向きも持つ量と理解している人も多い。
それは何故か？

$$A = 2$$

図 1: スカラー量

$$\mathbf{B} = (2 \quad 1 \quad 3)$$

図 2: ベクトル量

スカラーのイメージは、1 次元である。すなわち、 x 軸だけの数直線を考えると单なる大きさにすぎない。次にベクトルのイメージは、2 次元や 3 次元である。 x 軸だけでは、大きさしか表せなかったのに対し、数を束にすることで 2 つ目以降の数によって方向が決まる。

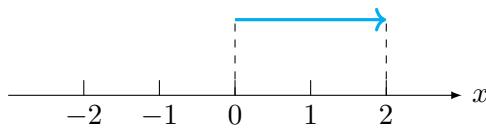


図 3: スカラーのイメージ

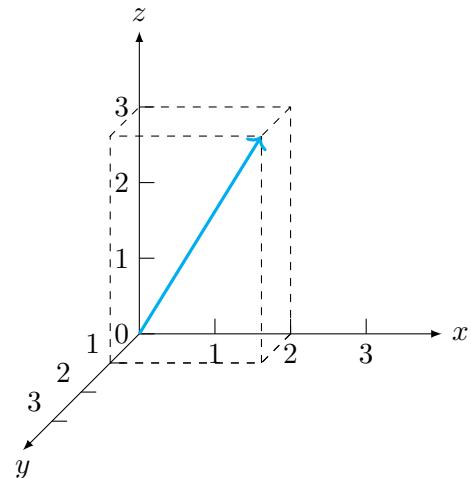


図 4: ベクトルのイメージ

簡単に説明すると、スカラーは 1 つの数であり、ベクトルは数と数の組^{*15}である。ベクトルは方向を表すことから、基本的に矢印で表現することが多い。そのとき大きさは、矢印の長さで表す。

^{*14}高校までは文字の上に矢印 \vec{x} を描いてベクトルを表現した。ただし、見づらくなりやすいという欠点があるため、大学以降ではあまり使われない。

^{*15}厳密には、線形空間の元である。線形空間の元として考えると、多項式もベクトル、函数もベクトル、微分方程式の解もベクトルとして捉えられる。これらのように、この世界にはベクトルでありふれている！

5.1 ベクトルの加減法

スカラーはそのまま加減乗除できるが、ベクトルはそう上手くいかない。ベクトルの乗法には内積と外積の2種類あり、除法はできない。分かりやすい加減法から説明する。

言葉で説明すると、矢印の終点ともう一方の矢印の始点を合わせ、1つの折れ線矢印と見なして始点と終点を線で結ぶ。減法の場合は、矢印を逆にしてから足す。矢印が逆のベクトルを逆ベクトルという。

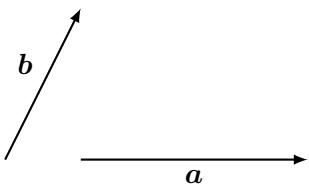
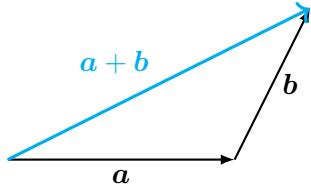
図 5: \mathbf{a} と \mathbf{b} 

図 6: 三角形を作る方法

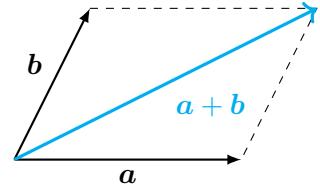


図 7: 平行四辺形を作る方法

5.2 単位ベクトル

ユークリッド空間（実数を n 個並べた全体の集合）において、3つの直交座標をそれぞれ x 軸、 y 軸、 z 軸とする。そのなかで大きさを「1」に仕立てたベクトルを単位ベクトル^{*16}という。

また、 x 軸と平行な単位ベクトルを i 、 y 軸と平行な単位ベクトルを j 、 z 軸と平行な単位ベクトルを k とする。

5.3 ベクトルの成分表示

単位ベクトルと係数倍を用いて、一般にベクトルを次のような式で表せる。

$$\mathbf{a} = A\mathbf{i} + B\mathbf{j} + C\mathbf{k} \quad (5.1)$$

また、係数を座標のように表して、

$$\mathbf{a} = (A \quad B \quad C) \quad (5.2)$$

とも表せる。

^{*16}単位**は基本的に、**の大きさを「1」に仕立てたもののことである。

参考文献

- [1] 技術でブランドを支える ケムファク. 知っておきたい様々な平均値. <https://chem-fac.com/average>, 2024. アクセス日: 2025-11-02.
- [2] 高校数学の美しい物語. 平均値, 中央値, 最頻値の求め方といくつかの例. <https://manabitimes.jp/math/985>, 2023. アクセス日: 2025-10-28.
- [3] 数学の景色. データの分散・標準偏差の定義・具体例・性質まとめ. <https://mathlandscape.com/variance>, 2023. アクセス日: 2025-10-28.
- [4] 内田誠一. 2-1-2. データの分布と代表値. <https://mi.u-tokyo.ac.jp/consortium/pdf/2-1-2.pdf>, 2020. アクセス日: 2025-10-28.
- [5] 内田誠一. 2-1-3. 代表値の性質の違い. <https://mi.u-tokyo.ac.jp/consortium/pdf/2-1-3.pdf>, 2020. アクセス日: 2025-10-28.

索引

Average, 5	中央値, 5, 6 代表値, 5
Dispersion, 7	
Maximum, 7	分散, 7
Mean, 5	外れ値, 5–7
Median, 5, 6	平均値, 5, 6
Minimum, 7	
Mode, 5, 6	散布度, 7
Range, 8	最大値, 7, 8
Standard deviation, 7	最小値, 7, 8
Variance, 7	最頻値, 5, 6
	標準偏差, 7
	算術平均, 5
	範囲, 8